ISSN 0912-7402

臨時号：2023年12月

NEWSLETTER

～ 水を守り　湖を救う ～

公益財団法人　国際湖沼環境委員会（ILEC）
本ニュースレターには、英語版もございます。

2023年11月7日から9日までの3日間、公益財団法人国際湖沼環境委員会（ILEC）はバラトン湖開発局とともにハンガリー・バラトンフュレドにおいて第19回世界湖沼会議（WLC19）「湖沼を越えて： 持続可能な利用に向けて科学・文化・ガバナンスを繋ぐ」を開催しました。バラトン湖畔での開催は、1988年の第3回会議（ケストヘイ）以来、35年ぶり2回目となります。

世界30か国より176人（ハンガリー国内73人、国外103人）が参加した開会式では、バラトンフュレド市長の開会宣言に続いて、ILEC理事長、環境省海洋環境課長、滋賀県副知事から世界の湖沼環境保全に向けて発言がありました。

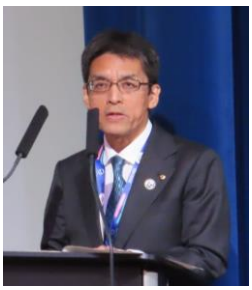
◆ 開会挨拶の概要

ILEC理事長　竹本 和彦

持続可能な湖沼管理（Sustainable Lake Management：SLM）を通じ、持続可能な社会の実現に向けた共通の課題について議論することは、SLMの機運が高まる中において時宜を得て意義深いことです。世界中の政府関係者、国際機関、研究者、市民社会から幅広いステークホルダーが一堂に会し、SLMに関する豊富な知識と経験を交換することを通じて、私たちの課題を議論し、解決策を探る機会となります。

環境省水・大気環境局 海洋環境課長　大井 通博

湖沼の豊かな生態系がもたらす恩恵を最大限将来に引き継いでいくため、具体的な将来像や目標を設定し、直接利害を受ける将来世代に訴え、湖沼の大切さを共感する裾野を拡げていくことが、さらに望まれるのではないでしょうか。



滋賀県 副知事　江島 宏治

「びわ湖の日」のように、「世界湖沼の日」の制定は、湖沼を抱える国や地域の方々が国境を越えて想いを一つにし、市民や企業、科学者、行政などが枠を越えて話し合う、湖沼の保全に向けた更なる機運の醸成につながります。

世界各地で湖沼の大切さに気付き、その環境を守るための具体的な行動につなげていくために、こうした世界共通のシンボリックな日を設けることは、大変有意義です。

◆ 科学委員の活躍

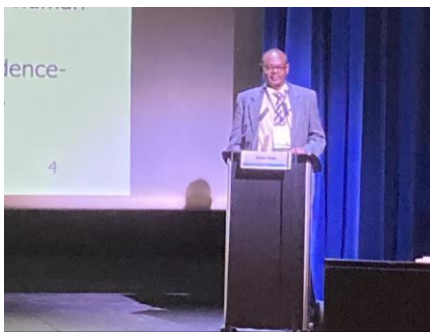
― 基調講演 ―

３日間の会期中、2日間にわたり、基調講演が行われました。１日目は主にハンガリー省庁、2日目はヨーロッパ諸国からの講演者ならびにILEC科学委員が講演を行いました。

サンドラ・アゼベド科学委員は、”One Health”（人、動物、環境の健康は一つという考えや運動）のための水系生態系の重要性について講演しました。「世界人口の増加に伴い水の需要が増え、淡水資源の減少や汚染による健康被害が引き起こされている。このことが気候変動も誘発し、さらなる水源汚染と健康被害を招くことから、早急な対策が必要。」と述べました。

また、清水芳久科学委員は、統合的流域管理のための水文学と水質のシミュレーションについて、琵琶湖流域におけるダイオキシン類・SS（水中浮遊物質量）の動態と分布を用いて発表しました。

さらに、ダニエル・オラゴ科学委員は、「ケニアにおける人為的・気候的要因に対する静水・動体水系とその持続可能な管理」と題した発表の中で、アフリカの湖沼の特徴をあげ、湖沼が気候の変化、特に降雨量と気温の変化に非常に敏感であることを示し、ILBM（統合的湖沼流域管理）アプローチの重要性を訴えました。



― 分科会 ―

分科会ではアデリナ・サントス-ボルハ副科学委員長、サンドラ・アゼベド科学委員、アジット・パトナイク科学委員、高松正嗣科学委員が座長を務めた他、アデリナ・サントス-ボルハ副科学委員長が「フィリピン湖沼の持続可能な管理のための自治体の役割」、アレハンドロ・フアレス・アギラル科学委員が「南米における湖沼の保全と回復への展望」等について発表しました。今後、分科会の抄録や論文集等、成果物をILECウェブサイトのWLC19ページ（ https://www.ilec.or.jp/wlc/wlc-11008/#seika ）に順次掲載していきます。ぜひご覧ください。

※本会議では次の16のテーマで分科会が開かれました。

- 統合的湖沼流域管理の事例
- モニタリング機器・革新・課題評価
- 湖沼に関連する持続可能な開発課題
- 水文学・水生微生物学
- 水域・沿岸生態系
- リビングレイクス
- 気候変動関連課題・評価・適応・取組
- 湖沼水・地下水・灌漑水に関する管理
- 集水域・資源価値・影響・緩和策
- 機能的開発地域としての湖沼
- 湖沼および集水域の技術・伝統・革新とその先へ
- 文化・遺産・社会・教育
- 国家および地方の戦略計画・評価・概念基礎
- 参加型計画・社会関与・相互学習
- 社会的および経済的利用と湖沼（生態系）サービスの評価
- 防災を含む湖沼流域管理のための法的および制度的措置

◆満ち溢れる“ユースパワー”

バラトン宣言にも盛り込まれたように、持続可能な湖沼の管理には、若い世代（ユース）の参画が重要です。WLC19では、昨年秋に開催した国際シンポジウム2022の「湖沼のエコツーリズムコンテスト」において優秀な成績を収めた学生６名が同コンテストで審査員長を務めた山本芳華ILEC理事の協力のもと、世界に向けて各湖沼での環境保全の取組や活動を発信、課題について議論し、今後の行動計画を共有しました。

― 分科会 （参加型の企画計画・社会的関与・相互学習）―

佐々木 良緒　平良 珠朱（成安造形大学）

大津市守山地区で実施している山・里・湖の繋がりを感じられる「たどる」を「たのしむ」エコツーリズムの事例を発表しました。昨年のコンテスト時の発表内容に加え、大津市守山地区で実際に行われたモニターツアーのフィードバックを盛り込み、エコツーリズムを通じて地域経済を活性化すると共に、湖の生態系と地域の結びつきを強め、環境保全に貢献する仕組作りについて発信しました。

― 分科会（文化・遺産・社会・教育）―

伊藤 佐恵子　田邊 有香（京都外国語大学）

NPO法人国際ボランティア学生協会（IVUSA)に所属する2名は、琵琶湖版のSDGsである「マザーレイクゴールズ(MLGs)」の達成を目指しており、そのゴールの一つである「地元も流域も学びの場に」に対しての活動として小学生を対象に企画・実施している「びわ湖の研究者になろうツアー」について発表しました。こちらの２名は次に紹介するユースセッションでもリーダーを務めました。

― ユースセッション - Youth Power in Action: Youth-driven Innovations for Sustainable Lake Management ―

窪園 真那　畠 麻理奈（立命館大学）　伊藤 佐恵子　田邊 有香（京都外国語大学）

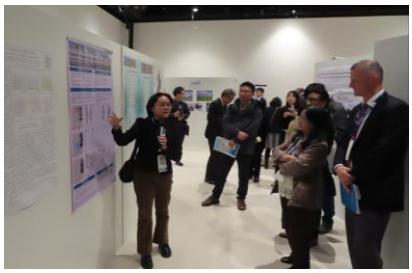
ILECが主催したこのスペシャルセッションでは、オンラインを含めて世界各国から参加した80人以上の若者たちが湖沼環境活動を共有し、ユースの持続可能な活動の在り方や湖沼環境保全に携わるユースの輪を広げるために必要なことについて議論しました。

滋賀県で活動する学生からの「エコツーリズムにユースが関与するにはどうすればよいか」との問いに会場からは、「ユースが興味のある活動や分野とエコツーリズムとを掛け合わせるのはどうか」との提案がありました。また、第20回世界湖沼会議（WLC20）に向けてネットワークを拡大していくことや特定の日に湖沼の美化活動を行い、互いに報告しあう事が掲げられました。

本セッションは、企画から運営までを琵琶湖の保全活動等に携わる大学生が自ら行いました。次世代の湖沼環境保全を担うユースが世界とつながり、環境保全活動や住民参加を加速させる絶好の機会になりました。

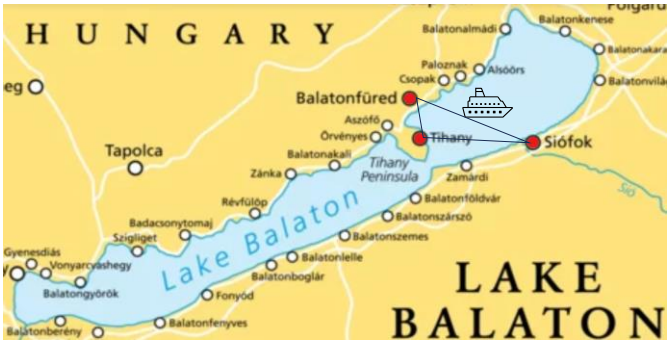
◆ ポスターセッション

展示は会期中を通して行われ、ガラディナー（参加者パーティ）の前にはポスター発表者が展示について説明する機会が設けられました。ILECからは、ILECの紹介、SLMへの取組の他、「ハチドリチャレンジ」と題して、未来のために何ができるかを書いた紙を会議参加者に貼ってもらい、干ばつの絵を湖の絵に変える啓発ポスターを展示しました。



◆ スタディツアー

会場近くの港から遊覧船でシオフォークとティハニを訪れました。シオフォークでは工事中のウォーターロック（洗堰）、ティハニではバラトン水理学研究所を見学しました。その他、船内で湖上の観測地点の見学や、地元高校生による環境に関するプレゼンテーションが実施されました。



◆ 高校生セッション

滋賀県とハンガリーの高校生によるスペシャルセッションがハイブリッド形式で開催され、滋賀県の高校生がオンラインで参加し、会場で参加したハンガリーの高校生とともに、それぞれが取り組んできた研究活動を発表したほか、将来の湖沼環境保全に向けた提言（ユース宣言）を発表しました。

◆ 国際コロキアム「SLMの推進に向けて：課題、現状、教訓」

11月6日（月）にWLC19のサイドイベントとして国連環境計画（UNEP）と協同で国際コロキアム（円卓会議）「SLMの推進に向けて：課題、現状、教訓」を開催しました。

対面とオンラインのハイブリッド形式で開催した本イベントには、16か国以上から134人の参加がありました。

本コロキアムでは、第5回国連環境総会（UNEA5.2）で採択された「持続可能な湖沼管理（SLM）」決議、さらに2023年3月に開催された国連水会議を踏まえ、水関連のSDGs達成に向けてSLMの重要性を共有し、推進するツールとしての統合的湖沼流域管理（ILBM）の役割について議論しました。

具体的には、

主催者および日本政府環境省からの挨拶、各国政府からのメッセージに続いて、世界各地域における取組が報告されました。

インドネシア政府関係者からはSLM決議後における湖沼を取り巻く国際情勢を紹介するとともに湖沼の重要性、生態系の劣化、保全の緊急性等について考える日として「世界湖沼の日」の制定に向けて各国政府に呼びかけること、また、滋賀県とその姉妹州、米国ミシガン州からは「びわ湖の日」「ミシガン湖淡水週間」の取組が紹介され、住民と一体となった取組の重要性が強調されました。

また、UNEPから5人の専門家がSLMの推進に向けた活動や加盟国と連携した取組についての説明、さらに国際的な関係団体からはSLMの推進に向けた経験、知見についてプレゼンテーションが行われました。この中でILECからは「琵琶湖・淀川流域管理におけるSLM」と題して琵琶湖・淀川流域ワークショップの報告ビデオを紹介しました。

これらを受け、パネルディスカッションを実施し、各国際機関、国政府自治体・活動団体等が役割にそって重層的な見方、考え方をもって整理していくことが示されました。最後に、高橋康夫ILEC理事・公益財団法人地球環境戦略研究機関所長から「『世界湖沼の日』の制定に向けて湖沼関係者間の連携を強化する機会となった。」と総括されました。

なお、本コロキアムのビデオとプログラムはILECウェブサイト（次のURL）よりご覧になれます。
https://www.ilec.or.jp/cooperation/mainstreaminglakes/#jic2023

◆閉会式

バラトン湖開発局のガボール・モルナー博士がWLC19を振り返り、開催までの道のりや関係者への謝辞を述べました。続いてILECのウォルター・ラスト科学委員長と中村正久副理事長がバラトン宣言に盛り込まれるべき要点について説明しました。最後に次回2025年のWLC20がオリンピック2032シティであるオーストラリア・ブリスベンで開催されることが発表され、開催地の紹介と参加を呼びかけるビデオが上映され幕を下ろしました。

◆バラトン宣言

WLC19での議論や参加者の意見を踏まえ、バラトン宣言が次のとおりとりまとめられました。

― 第19回世界湖沼会議 バラトン宣言抜粋 ―

今回の世界湖沼会議は、持続可能な湖沼管理・Sustainable Lake Management (SLM) 決議の採択後、初めて開催される世界規模の湖沼会議であり、気候変動との関連や、世界的に水生・陸生生態系に大きな影響を与えている異常気象（干ばつ、洪水）を含め、持続可能な湖沼管理における重要な課題と目標を明確にし、湖沼流域における統合的な気候変動対策計画策定の必要性を強調する貴重な機会となる。

- 国連総会における「世界湖沼の日」の制定実現に向け、先導する各国政府および関連する国内外の非政府組織に対し、支援を加速、強化する。「世界湖沼の日」の制定は、湖沼が人間の淡水需要や生態系の健全性、生物多様性において果たしている重要な役割に対する国際的な注目を集めるのに多大な貢献をする。

- 政策立案者、科学者、コミュニティの参加を含め、持続可能な湖沼管理の取り組みにおいて科学と政策の連携を強化するためのツールを作成し、確実に実施する。特筆すべき例として、SDGsに着想を得た、日本の琵琶湖流域の保全と持続可能な管理のための「マザーレイク・ゴールズ」を挙げる。

- 湖沼流域管理の課題に取り組むため、政策立案者、一般市民、関係するすべての湖沼利害関係者による積極的な湖沼管理を強化し、地域、国、地方レベルでのSLM決議の実施などの活動に対処するため、理解しやすい言葉で、現状と必要な措置に関する定期的な評価報告書を作成する。

- 持続可能な湖沼管理を促進するために、計画、意思決定、実施、評価など、あらゆるレベルで、若者の情熱、エネルギー、ビジョンを動員する。

なお、英語版（原文）および日本語版（仮訳）は、ILECウェブサイトのWLC19ページ（https://www.ilec.or.jp/wlc/wlc-11008/#seika）よりPDF形式で閲覧/ダウンロード可能です。

2024年3月にニュースレターNo.71を発刊します。次号にもWLC19アナザーストーリーを掲載しますので引き続きお楽しみに！

INTERNATIONAL LAKE ENVIRONMENT COMMITTEE FOUNDATION (ILEC)

― 事務局 ―
〒525-0001　滋賀県草津市下物町1091　公益財団法人 国際湖沼環境委員会
Tel: 077-568-4567 / Fax: 077-568-4568 / E-mail: infoilec@ilec.or.jp
Website: www.ilec.or.jp / Facebook: www.facebook.com/ilec.japanese